

1000年続くまちへ。

大丸有CSRレポート2009 Towards Sustainable Community OMY Community Social Responsibility Report 2009



私たち大丸有について

私たち大丸有コミュニティとCSR報告の方法についてご紹介します。

大丸有コミュニティについて

この冊子をお手に取っていただきありがとうございます。私たちは、大丸有（だいまるゆう）コミュニティといいます。大丸有^{*}とは、東京都千代田区にある大手町・丸の内・有楽町の3つの町名の略称です。

日本の発展を支えたビジネスと文化の中心地として、地理的・文化的・経済的な結びつきの強いこの地域は、これまで一体となってまちづくりを進めてきました。その過程で、大丸有に関わる地権者・ビルオーナー、テナント、就業者、行政、インフラ事業者、来街者などの方々が有機的に連携して、コミュニティを形づくってきました。私たちは、これを「大丸有コミュニティ」と呼んでいます。



大丸有のCSRについて

大丸有コミュニティでは、CSRに取り組んでいます。この冊子はCSRレポートです。

一般的には、CSRは「企業の社会的責任」(Corporate Social Responsibility)ですが、この冊子の中のCSRは「コミュニティの社会的責任」(Community Social Responsibility)を表しています。持続可能な社会の構築のためには、行政・企業・市民などさまざまな主体の取り組みが必要ですが、私たち大丸有コミュニティにも果たすべき重要な役割や責任があると考えました。

大丸有コミュニティが、持続可能な地域へと向かっているか？

大丸有コミュニティが、世界の持続可能性のためにいい影響を与えているか？

この冊子を通して、みなさまに現在の状況を評価いただき、大丸有コミュニティのCSRの取り組みをさまざまな形で支援していただきたいと考えています。

この冊子および、大丸有コミュニティについて、詳しくはウェブサイトをご覧ください。

CSRレポートは、ウェブサイトが完全版、この冊子がダイジェスト版となっています。冊子と同内容のPDFもウェブサイトからダウンロードできます。また、ウェブサイトにて **このようにマークされた** キーワードの説明を読むことができます。

<http://ecozeria.jp/csr2009>

* ここでの大丸有とは、大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会が定める地区の範囲を基本としています。行政単位の手町・丸の内・有楽町のうち、一部、大丸有に含まれない地区もあります

2050年へのまなざし

最前線で活躍する方々のお話から、2050年のあるべき社会像を考えます。

現在の社会のありかたの延長上に未来像を描く「フォアキャスト型」の考え方と、未来のあるべき社会から逆算する「バックキャスト型」の考え方があります。私たち大丸有は、「バックキャスト型」によってあるべき2050年の社会像を見定め、まち

づくりの方向性に反映したいと考えています。そこで、大丸有では各分野で活躍する先駆者の方々に、あるべき社会の未来像をうかがっています。今回は3名の方にお話をうかがいました。

質問

- 2050年は、どんな世界になってほしいと思いますか？
- 2050年は、どんな日本になってほしいと思いますか？
- その2050年には、都市やまち、市民の暮らしはどうなっていると思いますか？



隈 研吾 くま・けんご

1954年生まれ。建築家。隈研吾建築都市設計事務所主宰。東京大学大学院工学系研究科教授。79年東京大学建築学科大学院修了。コロンビア大学客員研究員を経て、01年より慶應義塾大学教授。09年より東京大学教授。『森舞台/登米町伝統芸能伝承館』、『水/ガラス』、『那珂川町馬頭広重美術館』、国内外での建築賞受賞歴多数。近作にサントリー美術館。著書に『自然な建築』（岩波新書）、『負ける建築』（岩波書店）、共著に『新・都市論TOKYO』（集英社新書）。



挾土 秀平 はさど・しゅうへい

1962年岐阜県高山市生まれ。左官。職人社 秀平組代表。左官職人の2代目として生まれ、高校卒業後は熊本と名古屋で修業を積む。83年技能五輪全国大会優勝。84年同世界大会出場。01年「職人社 秀平組」を設立。天然土にこだわった独創的な壁づくりで注目を集める。土や木、藁などの自然素材を使った作品や、土を原料にした化粧品によるアートメイクを手がけるなど、左官業を超えて活躍する。著書に『のたうつ者』（毎日新聞社）。



小林 光 こばやし・ひかる

1949年東京都生まれ。環境省総合環境政策局長。73年慶應義塾大学経済学部卒業後、環境庁（当時）入庁。同庁地球環境部環境保全対策課長として気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3）の日本への誘致、同条約の京都議定書の国際交渉、わが国初の地球温暖化防止法制（地球温暖化対策推進法）の国会提出などを担当。環境管理局長、地球環境局長、大臣官房長を経て、08年より現職。著書に『日本の公害経験』（合同出版）、『エコハウス私論』（木楽舎）など。

「石の美術館」「竹の家」など、土地の自然素材を活かし環境に調和する建築を手がけ、世界的に活躍する建築家・隈 研吾が、これまでのまちづくりを振り返りながら考えた、2050年のまちとは――。



菌が育つ「村」

都市を「村」の集合体だと考えればいいのではないのでしょうか。昔の古典的な定義で言えば「村」はコミュニティであり、そこに住んでいる人のつながりです。しかし、現代の「村」は、思い入れを持った人がそこに絶えず出入りをしているような場所だと思います。そこは、人間の出入りを拒まないインターネット社会的な自由さがありながら、思い入れをもつ者同士のリアルなフェイス・トゥ・フェイスの関係の強い社会でもあります。

「村」的な空間とは、大きな建築の塊から外れたものです。建築物は、塊になると人間にとって決して快適ではない、建築自体のロジックのようなものをもちはじめま

す。「村」はそういった大きなコンクリートの塊から外れ、ヒューマンスケールのオープンボックスから成っているイメージです。オープンボックスの中には、まるでいたけが育つように「村」の菌が育ちます。コンクリートには菌はなかなか育たないし、菌が育つには大きな塊は向かないんです。

2050年、未来の都市

私が考える2050年の未来の都市は、しいたけ畑のようなやわらかいオープンボックスでできた「村」の集合と、都市を支える超高層の大きなボリュームから成っています。オープンボックスの中ではさまざまな菌が育ち、菌の変化によって「村」は新陳代謝していきます。今の建築法規上は難しいですが、新陳代謝する建築は仮設建築のようなものでもいいかもしれません。大きなパーマネント建築の本体と、仮設建築のしいたけ畑スペースが組み合わさって広がっているような都市を、日本が先陣をきってつくったら、それは世界に発信できるひとつの都市モデルになるでしょう。

「村」では自然素材をたくさん使えるといいですね。これに関しても現在の法規では都心の大きな建物ほど自然素材が使いにくいのですが、大きな建物で防災が担保されている分、足元の「村」では自然素材が使いやすい。**サステナビリティ**というと、エネルギー問題に目がいきますが、**太陽光発電**の導入などには、かなりの意気込みが必要です。素材のサステナビリティならば、個人の小さな家やインテリア、小さなショップでも、挑戦できるものです。身近にできるサステナビリティにもっと注目するいいと思いますね。

また、これからは「屋外スペースのリデザイン」がキーワードになるのではないかと思います。20世紀の都市のテーマは「屋内化」でした。空間を囲い、空調し、いかに快適な屋内空間をつくるかを追求してきました。しかし、屋外空間はエネルギー面で有利ですし、屋外にいることは人間の心身のバランスにとっても良いことで

す。都市の中にも膨大な屋外空間が存在していますが、現在その多くは自動車のために存在しています。今後自動車の定義や価値が変わったとき、この膨大な屋外空間をどうデザインするかが、都市において重要になるでしょう。また、限定された都市空間に自然を導入することで、その自然に人間の意識を集中させ、大自然の中にいるよりも効果的な自然と人間のコミュニケーションを創出することができます。そういった技法を用いて進める都市の屋外化に大きな可能性を感じています。

長期的ビジョンをもったまちづくり

まちづくりには時間がかかります。そのため、実現したときにはすでに過去のものになっているという宿命がつきまといまいます。だからこそリーダーは、長期的なビジョンをもっているべきです。中途半端なリーダーは要望が来ると、とりあえず短期的に応えようとしますが、社会システムが変わる数十年先を見据えていれば、早急に解決すべきではない問題もあるはずで。短期的なニーズが来たとき、数十年後の未来をイメージし、多様な視点をもって、その時点で本当に重要なことを選別できるのが、本物のリーダーだと思います。今の日本には長



期的なビジョンのもとに発言できるリーダーはあまりいません。ただ、都市計画家や政治家だけに将来的な視点をもとに依存するのも無理な話。まちに関するあらゆる**ステークホルダー**が積極的に将来像を語り、考えていくことが大事だと思います。

建築とは巨大なノアの方舟

建築とは巨大なノアの方舟のようなものです。ノアが方舟に積み込んだように、建築物は、柱や壁といったエレメントに地域や歴史や文化を積み込んで、次の時代へ運ぶことができる乗り物だと思うんですね。そのような思いをもって建築物をつくっている立場からすると、日本では、今つくっている建物が大事にされていないことに問題を感じます。建築保存の議論でも、昔の建物のメッセージには敏感ですが、今つくっている建物が何十年、何百年後に伝える将来へのメッセージはなおざりではないでしょうか。自分たちがつくっている建物に、メッセージを込めて宝物にしていこうという意識をもち、何十年、何百年先の人たちに向かってコミュニケーションしている気になると、まちづくりはもっと楽しくなると思います。

土をこね、自然と対話する中から独創的な壁を生み出す左官・挾土秀平が考える、人と自然の共生のありかたとは、2050年のまちとは――。

強いものとやわらかいものが共存するまち

今の東京は、鉄、ガラス、磨かれた石、ステンレス、プラスチックなど、表面がつるつると光って凹凸がなく、硬い素材が多く使われてできています。もちろんこれらは20世紀のまちをつくってきた素晴らしい素材です。しかしそのような硬い素材から跳ね返ってくる光は直線的で鋭く、人間が長くとどまる場所には向いていないように感じています。一方、土壁のような朽ちていくやわらかさをもったものは、光をやわらかく受け止め、やさしく跳ね返す。そのため気持ちが落ち着いたり、緩みを感じたりする空間をつくることができるのです。しかし、このような自然の素材には硬さが足りません。未来のまちは、硬く強靱な素材と自然の中にあるやわらかい素材を組み合わせ、強いものとやわらかいものが互いを補い合うような都市であるといい。



未来のまちの植生には、チューリップやバラなどの外来種ではなく、その土地に昔から根付く山野草を使用すると良いでしょう。私が暮らす飛騨高山では、季節の移ろいととも、福寿草、カタクリ、舞鶴草などたくさんの花々が入れかわり立ちかわり咲き乱れます。このような四季の変化と植物の多様性・豊富さが、日本の個性だと思うんです。雑草など存在しません。どんな小さな草にも名前があり、ちゃんと見てやれば、美しい。私が日ごろ扱っている土も同じです。汚い土などひとつもない。地球上に汚いものなど、ひとつもないんです。そう考えると、整備された芝生や端正なコンクリートの壁よりも、不ぞろいな山野草の庭や表情のある土壁のほうが魅力的だと感じませんか。

私が2050年のまちをつくるならば

私が2050年のまちをつくるならば、そこにコンクリートの巨大な壁をつくり、その上に華やかなショーウィンドウを並べましょう。壁から地面にかけての斜面には広々とした土手が広がり、そこには、山野草が咲き乱れています。そこでは、壁の上を歩きながら、都会的にウィンドウショッピングを楽しむ人たちと、土手に寝そべり自然を味わう人たちが、それぞれの時間を楽しんでいます。

私はまちをつくる過程にもこだわりたい。未来のまちづくりは建築物が建つ過程を含めて美しくなければならぬと思うんです。ブルドーザーで貴重な植物も木も根こそぎ掘って地面をならし、大量のゴミをブルーシートで覆い隠しておきながら、最後に枝葉をすべて切り取られた木を植栽しただけで「緑豊かな土地」を標榜するまちづくりには、怒りを感じます。私は、自然が先にあり、建築は2番目にあるものだと考えています。なので、まず植栽を手がけ、植物が育ってきたら建築にとりかかる。花々が咲き乱れる中でできあがる美しいまちを、誰もゴミで汚したくはならないでしょう。できる過程までもが美しいまちは、真に美しいまちだと思います。



未来を見ることばかりが「1000年」を語ることではありません。土地の植物を見出して植えること、伝統の技術を現代に適用することは、現在まで続いてきた土地の歴史を1000年遡って語ることではないでしょうか。また、現存するものを大切に育てることは、それをはぐくんだ過去とこれからはぐくまれる未来の両方の1000年を語ることではないでしょうか。このような都市のあり方は、四季と文化に恵まれた東京というまちでこそ、世界に向けて発信すべきことだと思います。

美しく、豊かな時を刻むまち

時とともに進化するまちがあってもいい。現在、多くの石畳には海外から輸入された御影石が使われていますが、御影石は硬く摩耗しない素材です。日本にあるやわらかい石を、あえて多くの人が歩く場所に使用すると、そこを人が通るたびに、日々素朴にすり減っていきます。川の水が石を研ぐように、人のエネルギーで石を研ぎ、時を刻むのです。そうして、まちで、人によってはぐくまれた素材を取り出し、そこに水を流したとしたら、それはどんなに美しく豊かな光景になるでしょう。まちは一回つくったら1000年もつ、という考え方ではなく、時とともに移行行くと考えてはどうでしょうか。そう考えると、使う素材や、まちのつくり方も変わっていくと思います。

左官と「水」「土」「光」

私は「水」「土」「光」に関わるものはすべて左官であると考えています。植物を植えることや石を組むことも左官である、と。地球上のほとんどのものは、「水」「土」「光」からできています。「水」「土」「光」でつくったものは風景になり、風景は自然であり、地球です。そう考えると、左官は地球と向き合う第一人者だと言えるのではないのでしょうか。

このような考え方や私が手がける土壁は、モダン、革新などと称されます。しかし、これが今後伝統となり、左官の歴史の一部になっていくとすれば、私は左官の長い歴史の中の「現代の左官」であるに過ぎない。伝統を受け継いだ職人は、工芸館に飾られてはなりません。飾られているだけでは、伝統の「わざ」はそのまま死んでしまいます。

私は左官の伝統を受け継いだ現代のランナーとして、未来の左官の歴史を切り拓くことで、過去の「わざ」を引き立て、未来へつないでいきたい。まちづくりも、新しいことで次世代の伝統をつくっていくという考えをもつと良いかもしれません。そうすれば、さまざまな変化をポジティブに受け入れて進化していける都市をつくることのできるのではないのでしょうか。

エコハウスに住まい、自らもエコな暮らしを実践する環境省総合環境政策局長・小林 光が考える、家やまちからはじめる地球の「サステナビリティ（持続可能性）」とは、2050年のまちに必要なものとは――。

エコハウスに住まうということ

私は10年近くエコハウスで暮らしています。自宅を建て替えし、太陽熱利用、太陽光発電、気密や断熱、自然素材の使用、雨水や風呂場の排水を利用するシステムなどを取り入れました。もちろんサステナビリティを家のエコ化だけで実現することは不可能です。しかし、自宅で排出されるCO₂は年々増えていますし、家のCO₂低減について考えることが、地球全体の「サステナブル」をつくるきっかけになったらいい、と考えたんです。ただ、人は与えられた環境に慣れると、要求を高めてしまうものです。最初はエコ暖房で満足していても、そのうちそれでもあたりまえで、もっと快適にと思うようになってしまいます。家庭環境でいかに意識を持続させるか



が課題です。また、子どもやお年寄りは、エコへの知識や意識、身体能力の差からどうしてもエネルギーのロスが起きやすいもの。未来に向けて、世代間の差を埋めるようにハードが進化するといいですね。たとえば、暖房の効きが悪ければ「窓が開いていませんか」と機械が注意してくれるなど、人間の間違いやくせを先読みして助けてくれるようなものです。

国や自治体による支援

省エネの技術が進み、現在はエコハウスへの改修の補助制度や支援制度が増加しています。環境省の地域協議会民生用機器導入促進事業や、経済産業省の高効率エネルギーシステム導入促進事業といった助成制度のほか、省エネ改修後5年間のローン減税制度など、国や自治体を実施しているこれらの制度をぜひ利用してもらいたい。制度を利用して家のエコ化を進めてもらうためには、エコ住宅を希望する施主と環境性能について詳しい建築家をマッチングするなどの制度ができる

と、より良いでしょう。環境性能に関しては、目安とそれをサポートする仕組みをつくるといいと思います。やってはいけないことの禁止はできますが、良いことを強要するのは難しいものです。日当たりや風通しは家によって異なるので、一律に強制するわけにもいきません。平米あたりの総合的なCO₂排出量やエネルギー負荷、あるいは平均的な家族がそこで暮らした場合の年間光熱水費のランキングなどについての目安をつくり、それに合わせて専門家の指導を受けられるといいですね。

サステナブルなまちづくり

環境省では、2007年に省内のすべての窓に樹脂サッシの内窓を設置し、二重窓にしました。これによって、月曜の午前に暖房を入れれば、あとの1週間は無暖房で過ごせるほどの断熱効果が得られ、空調費が大きく削減できました。また、職員のタクシー利用に関しても乗り合いを増やすよう呼びかけたり、利用前のシステム申請や後払い方式などの制度を取り入れることで、省内のタクシー利用を以前の半分以上に減らすことができました。ただ、このような個々のビルや企業での設備的なCO₂削減には限界があります。街区ごとに廃熱を利用する、さらに広い地域を巻き込んで設備をシェアするなど、エリアを超えたソリューションが今後出てくるとおもしろいですね。

時代が進むにつれて難しくなる課題に、私たちは常にチャレンジしていく必要があります。今までの環境法は、設備の環境性能規制などの細かな事柄が中心で、建築物やまちづくりが重視されていませんでした。しかし、CO₂を削減してサステナブルなまちを実現していくためには、まちをコンパクトにする、交通公共機関を使いやすくするなど、まちという大きな単位での改造の要素を環境法に組み入れる必要があります。急激に技術が進歩している自動車の分野でも、燃費規制だけでは十分な解決はできません。都市計画や建築が環境を取り入れるという方向が、今後は増えていくでしょう。



地球全体が変わっていくことも、可能

まちは小さな地球です。地球の縮図として、未来のまちはオフィス街といえども事務所だけでなく、商店や学校、公園など人が行き交い生活する場が組み込まれると、もっとおもしろくなると思います。地球のさらなる縮図は、人、経済、生活、緑などすべてが凝縮されている、家ですから。大丸有は、街区のビルオーナーや働く人々がまちづくりの議論に参加しているところが良いですね。エリアマネジメントという言葉は教科書的には語られますが、実行するのは難しい。そういったものが自発的に生まれて運営されている点が興味深い。地域を周回する丸の内シャトル（ハイブリッドバス）や打ち水プロジェクトなどのイベントの開催、「オフィス町内会」によるごみ削減など、まち全体で考えているからこそ得られる成果も挙がっていますね。需要が変われば、供給も変わるもの。エコな需要が増えれば、それに合わせてエコな供給は発達し、世の中の仕組みが変わっていきます。まずは家やまちなど身近なところから、行動を起こしてみることでいいですね。そのアクションから地球全体が変わっていくことも、きっと可能ですよ。

大丸有の未来ビジョン

私たちが描く持続可能な環境共生都市のビジョンをご紹介します。

「大丸有 環境ビジョン」

「1000年先まで、いきいきとしたまちでありたい」
そんな願いを込め、大丸有は2007年5月、「未来へつなぐまちづくり 大丸有 環境ビジョン」を発表しました。これは、超長期の俯瞰的な視点に立って、**環境共生型都市モデル**のデザインを示し、大丸有地区を再構築していくことを広く社会に宣言するものです。

策定にあたっては、大丸有に関わるさまざまな**ステークホルダー**のみなさまのご意見を仰ぎながら、野城智也氏（東京大学生産技術研究所所長、教授）を座長に、多くの有識者やシンクタンクの方々が参加する研究会で取りまとめました。

内容は、将来像を8つの分野に分けて示したほか、その将来像に至るための**ロードマップ**として9つの施策の方向性を提示しました。

大丸有では、この「大丸有 環境ビジョン」に示した将来像とロードマップに沿って、**持続可能**なまちづくりを進めていく計画です。

8つのビジョン

- 気づいて、変わっていくまち
- 自分の「体調管理」をきちんとするまち
- コミュニティ全体で世界の課題に取り組むまち
- 自然とのつながりを大切に、緑や生きもののにぎわうまち
- 世界へ、いい波紋を広げるまち
- 他の地域に支えられていることへの、責任を果たすまち
- 時代に応じて「自己進化」するまち
- みんなが**安心・安全**に過ごせる快適なまち

9つのロードマップ

- 1 環境関連データのセンシング・蓄積・活用
- 2 大丸有地区を超えた貢献と情報発信
- 3 環境・エネルギーマネジメントシステムの構築
- 4 環境負荷の低い新たな交通・物流システムの構築
- 5 水系（バイオリージョン）の活用・水網都市の復権
- 6 外部空間・公共空間の体系的活用
- 7 廃棄物の多段的活用
- 8 脆弱性克服を通じた環境負荷抑制
- 9 新たな環境ビジネスの創出と育成



「未来へつなぐまちづくり
大丸有 環境ビジョン」

「大丸有 環境ビジョン」の概要を示した小冊子（PDF）を下記URLよりダウンロード可能です。

大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会

<http://www.lares.dti.ne.jp/~tcc/>

トップコミットメント

持続可能なまちに向けて、行動を積み重ねていきます。

大丸有コミュニティの代表者による、未来の宣言です。

2008年度を振り返って

2007年の米国住宅バブル崩壊に端を発した金融危機が世界を覆っています。100年に一度といわれるこの危機によって、都市への投資も冷え込んでいます。また、世界も日本も成熟社会へと向かっており、すべての都市がこれまでのように成長できるわけではないでしょう。こうした中であっても、大丸有は高い競争力をもつ「世界から選ばれるまち」のひとつであり続けていると考えています。その理由のひとつに、大丸有コミュニティの社会的責任（CSR）の取り組みが挙げられるでしょう。特に環境面では、公共交通機関も発達しているうえ、エネルギー効率も高く、世界のビジネスセンターで最も生産効率が高い都市のひとつだと言えます。

2008年度のCSRレポートでは、金融機関や投資家が投融資する際やグローバル企業が拠点を構える際に、選定基準として環境面の取り組みを重要視しはじめているとお伝えしました。しかし、現在ではむしろ前提条件になっているといっても過言ではないでしょう。大統領が変わったアメリカでは、環境を切り口にした経済再生を行おうとしています。日本も環境に重点を置いており、2008年度には政府が「環境モデル都市」13都市を選定し、大丸有を含む千代田区もその1都市に選ばれました。これは、大丸有が国内だけでなく海外

の都市にモデルを示すことへの期待のあらわれだと考えています。大丸有は、**環境共生都市**のありかたを世界に発信する「都市の環境ショーケース」としての役割を、引き続き担っていきたいと思います。

また、2008年9月には「まちづくりガイドライン 2008」も改定し、大丸有コミュニティが**持続可能**な開発に取り組むことをより明確にしました。建物の再開発などハード面だけではなく、まちに集う一人ひとりの意識変革、企業のCSRの取り組みやワークスタイル・ライフスタイルの変革といった、ソフト面の**エリアマネジメント**にもさらに力を入れていく計画です。

時代に応じて「自己進化」するまち

大丸有コミュニティは、明治以来100年間にわたって、時代の要請に応えながら「自己進化」してきました。現在の状況を見渡すと、エネルギー・資源価格の乱高下が問題となっています。世界情勢につながる外的変化にも強いまちであるためには、インフラの再整備が不可欠だと考えています。エネルギーにはコストとともに安定的な供給という観点も重要ですので、未利用エネルギーや自然エネルギーも積極的に取り入れていきたいと考えています。時代に先駆けて導入した地域冷暖房も間もなく更新期を迎えるため、これからの時代を

見越した高効率化やネットワーク化を図っていきます。また、日本社会では今後ますます人口減少と高齢化が進展していきます。こうした中、建物などのユニバーサルデザインを進め、地上や地下の歩行者ネットワークやシャトルバスなどの公共交通機関の整備を推進することで、さまざまな方に利用しやすいまちにしていきます。こうした社会・環境の課題をふまえて都市構造論の観点で俯瞰的に見たとき、大丸有のあるべき方向性は「必要な機能が集約された利便性の高いコンパクトシティ」でしょう。大丸有エリア内にどんな機能を集約すべきか。どんな個性をもったコンパクトシティにするか。周辺地域との機能分担なども議論しながら、ここ数年の間に方向性を示したいと考えています。

社会からの要請に応えるまち

気候変動や格差など、現代社会にはさまざまな問題が顕在化しつつあります。こうした課題に対し、自らの地域でできることは自らの責任として取り組む必要があります。しかし、大丸有は他の地域と相互に支え合って成り立っており、すべての課題をこのまちで解決できるわけではありません。ですから、広範な社会からの要請に応えていくこともまちづくりの重要な点だと考えています。

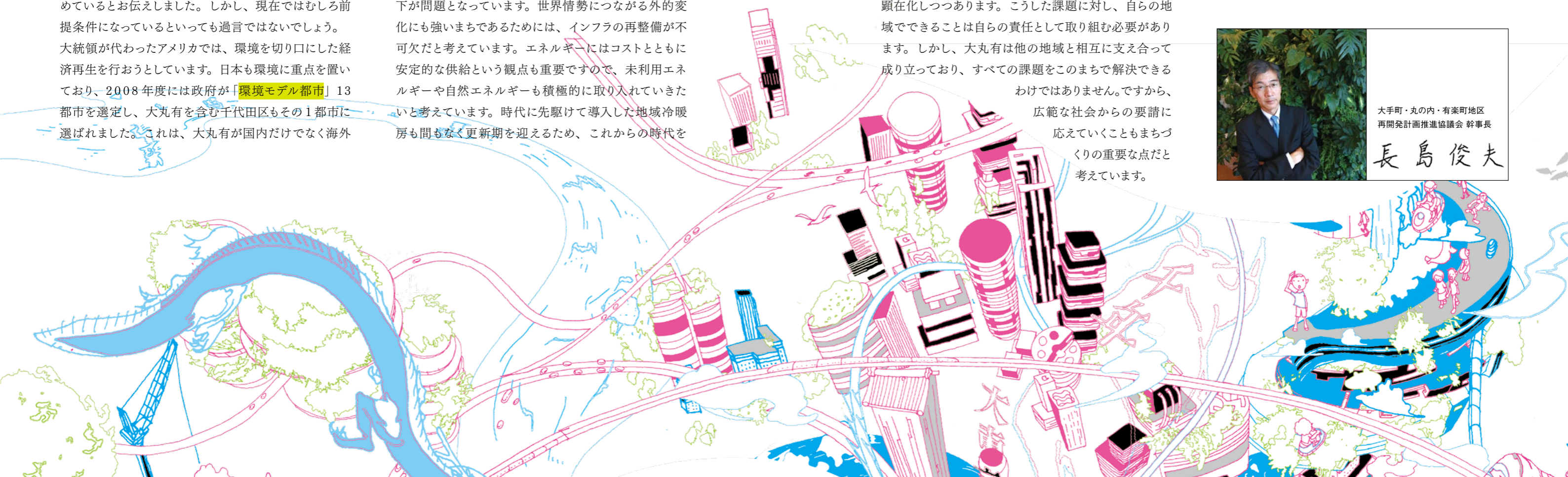
たとえば、大丸有に資源を提供してくれる地域で、原材料をつくる過程で**生物多様性**に大きな負荷をかけているならば、より影響の少ない方法で生産できる技術を、企業の知恵が集う大丸有から提供できるかもしれません。建材や紙として多くの木材を使用している大丸有が、環境に配慮した木材を選ぶことで、地域の森の維持管理にも貢献できるかもしれません。すでに、浅間山麓エリアでの森づくりや相互交流、就業者による山梨県北杜市での自然体験など、大丸有コミュニティは取り組みをはじめています。今後、地方の疲弊や、都市と地方の格差の問題なども、世の中の議論が整理された段階で、きちんと目を向けていく必要があると考えています。

私たちは2007年に「**大丸有 環境ビジョン**」を定め、将来像を見定めました。これからは「行動」の段階です。2009年度以降も、具体的なCSRの「行動」を積み上げ、持続可能なまちをめざしていきます。



大手町・丸の内・有楽町地区
再開発計画推進協議会 幹事長

長島 俊夫



2008年度のCSRアクション

環境ビジョン実現に向けた、2008年度の主な取り組みをご紹介します。

CSRアクションの概要

大丸有エリアでは、まちの持続可能性を高めるため公民が協調して「大丸有 環境ビジョン」に掲げるさまざまな分野で行動を開始しています。屋上緑化などのハード面の整備、環境イベントやセミナーなどのソフト面の活動、まちづくりガイドライン整備や先進技術、環境政策などの調査研究。こうしたCSRアクションのうち、2008年度に実施したものを「大丸有 環境ビジョン」の8つのビジョンごとに分けてご紹介します。

気づいて、変わっていくまち

1 まちづくりルールを定期的に見直し 「まちづくりガイドライン2008」発表

東京都、千代田区、JR東日本、大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会（大丸有協議会）で組織する「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり懇談会」は2008年9月、「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくりガイドライン2008」を公表しました。まちづくりを進めるための具体的な指針を自主的に定めた本ガイドラインは、2000年3月の発表以降、今回が2回目の改訂となります。今回の改訂にあたっては、再開発の進捗や都市再生の進展、地球温暖化などの環境問題の現状をふまえた内容を加えました。



2 省エネと朝の活性化の両立を 「朝EXPO in Marunouchi spring・autumn」

2006年11月に開始した「朝EXPO」は、朝のライフスタイルを提案するイベントとして毎年春と秋の開催が

定着してきました。

2008年度は春・秋とも、エコツツエリアやニッポン放送イマジンスタジオなど大丸有エリアの9会場で、ヨガ、ランニング、川柳、落語、座禅などさまざまな朝の過ごし方を体感してもらいました。国際フォーラムでの「ネオ屋台村」、東京サンケイビルでの「モーニングコンサート」、丸の内オアゾでの「ゴルフファッションショー」「きものセミナー」なども行い、春・秋の合計で延べ約26,000人（うち有料プログラムは1,900人）の参加がありました。大丸有エコポイントとの連動や使わなくなった携帯電話の回収も行い、環境活動へのきっかけをつくりました。

3 環境問題を体感しながら考えよう 「打ち水プロジェクト」「エコキッズ探検隊」

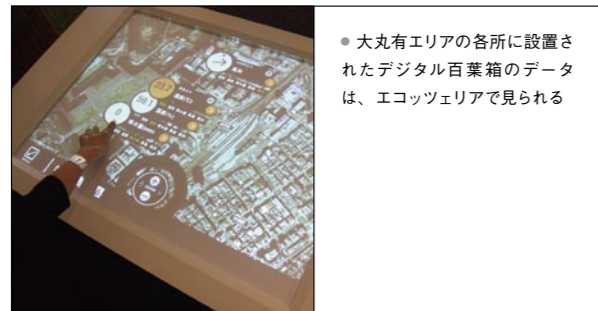
「打ち水プロジェクト」は、伝統的な生活の知恵「打ち水」でヒートアイランド現象緩和をめざしたイベントです。「打ち水プロジェクト2008」は8月1日から11日にかけて大丸有エリア内の4会場で、就業者を中心に延べ約1,900人が参加しました。大丸有エリアで使った水を高度処理した「中水」を利用して日本の優れた知恵を都市で活かしました。併せて大丸有エリアの各所で気温の変化を機器計測するとともに、参加者が体感温度を携帯サイトに報告する「打水感測」などを行いました。また、子どもたちに都市での活動を通じて地球温暖化や資源循環について楽しく学んでもらう「エコキッズ探検隊」を2008年8月に行いました。今回は冬休み特別編も加え、12日間で8つの体験プログラムを提供して、延べ454人の子どもたちと父母が協力しながら大丸有エリアでの環境学習を修了しました。



自分の「体調管理」をきちんとするまち

4 環境モニタリングと可視化

大丸有エリアでは、4か所に気象情報をリアルタイムで計測できるデジタル百葉箱を設置しています。計測データは新丸ビル10階のエコツェリアにあるマルチタッチディスプレイで見ることができ、ヒートアイランド対策の効果を可視化し、風の道に配慮した設計に役立てています。今後も計測箇所を増設し(2009年度3地点新設予定)、継続的な観測と分析を行っていきます。



●大丸有エリアの各所に設置されたデジタル百葉箱のデータは、エコツェリアで見られる

コミュニティ全体で世界の課題に取り組むまち

5 ふだんの行動が「エコ」になる 大丸有エコポイント

大丸有エコポイントは、大丸有エリアで働く人や訪れる人が毎日のように使う交通系電子マネー Suica を利用して、環境に貢献する仕組みです。エコポイント参加店舗で Suica を使って食事やお買い物をする、代金の1%がエコ基金に積み立てられ、還元メニューなどの原資に使われます。また、会員登録した Suica の利用者には、代金



●「EAT JAPAN in Marunouchi」開催中に、大丸有エコポイントのシステムを使って東京駅とマルキューブをつなぐスタンプラリーが行われた

支払い時や環境イベントへの参加時などに、エコポイントが貯まり、エコグッズや環境貢献活動への寄付・投資の還元メニューなどと引き換えることができます。

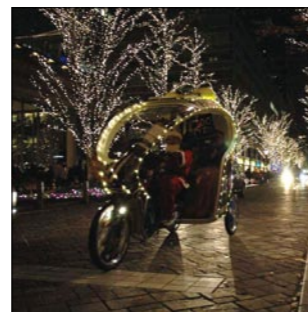
秋に開催した「EAT JAPAN in Marunouchi」では、このシステムを利用したスタンプラリーや、会員登録した人向けの「小岩井じゃがいも詰め放題市」も行いました。

現在、大丸有エコポイント実行委員会が組織され、2009年秋の本格導入に向けて準備が進められています。

6 にぎわう「あかり」をグリーン化 グリーンパワーキャンペーン

大丸有エリアでは、クリスマスやバレンタインデーなどに合わせてさまざまなイルミネーションがまちを飾ります。このイルミネーションに使われる電力を、人、企業、まちが協力して「グリーン電力証書」によってグリーン電力化する取り組みがグリーンパワーキャンペーンです。イルミネーション主催者に「グリーン電力証書」を直接購入していただくほか、小口に分けた「グリーン電力証書」(1枚100円)付きの商品・サービスの購入により、参加者にも負担していただきました。

2008年度は、「丸の内イルミネーション2008」、「光都東京・LIGHTOPIA2008」、「HARMONIA '08—'09 TIF 光と音のハーモニー」、「有楽町マルイ「クリスマスイルミネーション」、「Sparkling★Christmas」の5イベントの総電力約45,300kWhをすべてグリーン電力化することができました。小口のグリーン電力証書付き商品・サービスも、レストランの特別メニューや環境ツアー、スペシャルライブなどさまざまなものを用意し、参加者のご協力で約2,500枚分をご購入いただきました。

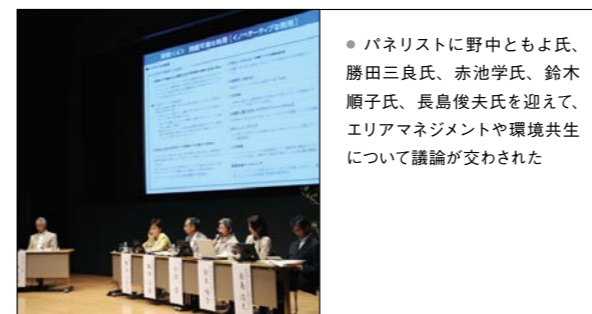


●太陽光による電力で光る特製ペロタクシーがイルミネーションに彩りを添えた

7 公民連携のまちづくり

大丸有協議会20周年記念シンポジウム

大丸有協議会は地権者間で協定を結び、まちの将来像を公民で共有して、よりよい再開発を進める活動をしてきました。この大丸有協議会が2008年に20周年を迎えたことを機に、20年間の歩みや現在の取り組みを紹介する展示を行幸地下ギャラリーとマルキューブで行い、モバイルラリーゲームも開催しました。併せて、丸ビルホールでシンポジウムを開催し、伊藤滋早稲田大学特命教授による基調講演「都市計画による低炭素化の試み」に続き、パネリスト5名を迎えて、小林重敬東京都市大学教授のコーディネートで「公民協調による大丸有のまちづくりと今後への期待」と題したシンポジウムを行いました。環境をテーマに日本全国や世界へ発信するショーケース的なエリアとなる必要性や、環境の取り組みを社会貢献的視点だけでなくビジネスとして捉えて活用する重要性などが議論されました。



●パネリストに野中ともよ氏、勝田三良氏、赤池学氏、鈴木順子氏、長島俊夫氏を迎えて、エリアマネジメントや環境共生について議論が交わされた

8 都市の環境の取り組みを見る、つくる エコツェリア

大丸有エリアの環境の取り組みを推進する環境共生戦略拠点として、2007年5月に開設したのがエコツェリアです。2008年度は、約550回のイベント・セミナー利用があり、約11,200人が来場しました。多くの方々に環境への気づきを促し、環境対策の活発な議論を行うことができました。

こうした一連の情報発信・啓発活動などが評価され、環境に関する取り組みを表彰する第10回グリーン購入

大賞や第7回日本環境経営大賞の環境価値創造賞を、運営組織のエコツェリア協会(一般社団法人 大丸有環境共生型まちづくり推進協会)が受賞しました。また、エコツェリア協会が大丸有協議会と共同制作した「大丸有CSRレポート2008」が、第12回環境コミュニケーション大賞の奨励賞を受賞しました。

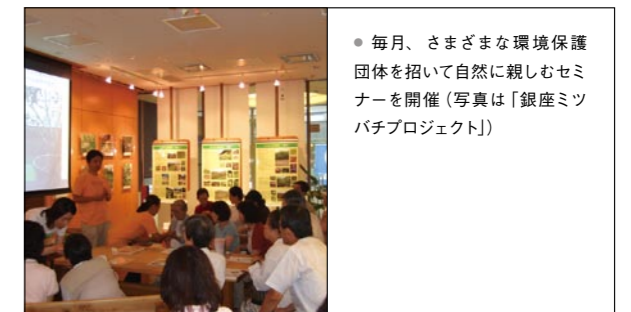
自然とのつながりを大切にし、
緑や生きものでにぎわうまち

9 Nature Info Plaza 丸の内さえずり館

新有楽町ビル1階にあるNature Info Plaza丸の内さえずり館は、都会の中に居ながら自然に親しみ、学び、考え、体験できる場として、三菱地所が社会貢献の一環として運営している施設です。便利な都会で暮らしているうちに地球のリズムを忘れてしまいがちな来街者や来客者に、ときには立ち止まって大地の鼓動に耳を澄ましてみる機会を提供しています。

展示ギャラリーでは、自然保護や環境保全に関する企画展を毎月開催しています。毎月異なるテーマを設け、その分野で活躍している環境保護団体との協働により実施しており、関連イベントやセミナーも開催しています。さまざまな観点から自然環境を考えることで、自然の大切さや人との係わり方についての知識を深めることができます。

その他、丸の内近辺でのフィールドイベントも数多く行っています。とりわけ「皇居東御苑の自然観察」は、2008年度に9回開催し、延べ約470名にのぼる多くの方々にご参加いただきました。



●毎月、さまざまな環境保護団体を招いて自然に親しむセミナーを開催(写真は「銀座ミツバチプロジェクト」)

世界へ、いい波紋を広げるまち

10 世界の先例となるまちへ 環境モデル都市

2009年1月、大丸有エリアを含む千代田区が国から「**環境モデル都市**」に選定されました。環境モデル都市とは、日本がめざす「低炭素社会」の具体的モデルを国内外に示すため、先駆的な取り組みに挑戦する都市です。日本全国で13都市が選ばれ、東京都内では唯一の選定自治体となりました。自治体が提出した環境対策計画の実現に向け、関係省庁が連携して支援が行われます。

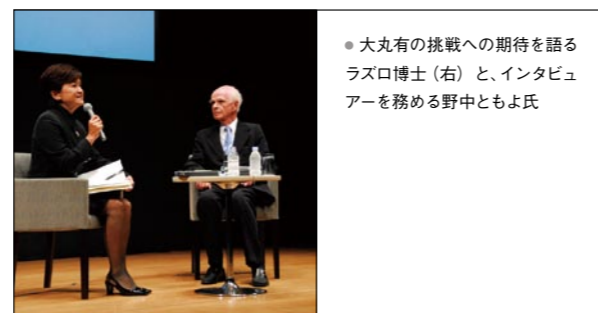
千代田区の計画の中で大丸有エリアは、**環境共生型ビジネスタウン**の形成を図り、都市型の地球温暖化対策モデルを提示していきます。具体的には、**地域冷暖房施設**の高度化や、**未利用熱利用**などによるエネルギー効率向上推進、東京湾と皇居をつなぐ「**風の道**」を創出する広場や並木の整備、**グリーン物流**のモデル構築、東京駅におけるクリーンエネルギー導入などに取り組みます。実現に向けた調査研究として、学識者や大丸有エリアのエネルギーインフラ事業者、国土交通省、東京都、千代田区などの参加で、「先導的都市環境形成促進事業」による調査を行い、主に地域冷暖房システムの高度化についての方向性を探りました。



11 挑戦する都市の哲学を語る 丸の内地球環境倶楽部キックオフシンポジウム

2008年10月に丸ビルホールにて、企業が連携して環境問題を研究するネットワーク「**丸の内地球環境倶楽部**

部」の発足を記念したシンポジウムを行いました。伊藤滋エコツツェリア協会理事長による挨拶の後、世界賢人会議と評される「ブダペストクラブ」会長を務める哲学者のアヴィン・ラズロ氏が来日し、「**持続可能な文明創造への挑戦**」と題して基調講演を行いました。「自らが宇宙や地球という大きなシステムの一部であり、未来や世界を創造する主体であることに気づくこと」の重要性について語られました。その後、**エコツツェリア**のプロデューサー陣により「都市のデザイン」や「実践的環境コミュニケーション」についてプレゼンテーションや議論が行われました。



12 エコな生活と仕事のスタイルを提案する SoulSwitch in MARUNOUCHI

エコライフスタイルとエコワークスタイルを提案するイベント「SoulSwitch in MARUNOUCHI」を7月30日から8月3日にかけて行いました。安藤忠雄氏や養老孟司氏、出井伸之氏らが参加したシンポジウムのほか、仕事、食、コミュニケーション、家族など10のカテゴリーでトークライブやワークショップ、展示などを展開しました。併せて東京国際フォーラムでスペシャルライブを開



催し、参加アーティストから環境に関するメッセージが来場者に伝えられました。

他の地域に支えられていることへの、責任を果たすまち

13 さまざまな地域の食と作り手に出会う 「EAT JAPAN in Marunouchi」

日本の食の問題を解くカギは都市にある——大丸有コミュニティの思いと、農林水産省が国民に食料自給率向上を呼びかける「FOOD ACTION NIPPON プロジェクト」が呼応して2008年10月に「EAT JAPAN in Marunouchi」が開催されました。石破茂農林水産大臣の立ち会いのもと、食にさまざまな形で関わる方々によるシンポジウムやトークショーを行いました。大丸有エリアにお店をもつシェフたちが薦める生産者が全国から集まったマルシェ(市場)も開かれ、レストランでも国産食材をふんだんに使ったメニューが展開されました。食と農に関するこだわりを直接聞き、感じる場となりました。このイベントを契機に、世界へ食育を発信するシェフのネットワーク「丸の内シェフズクラブ」が発足し、定期的に国産食材を販売する「東京丸シェフ マルシェ」の第1回が2009年2月に開かれました。

14 地域と顔が見えるお付き合い 「浅間山麓元気アッププロジェクト」 「空と土プロジェクト」

都市と地方が正しくつながろう。そんな思いをはぐくむ地域連携プロジェクトがはじまっています。長野県小諸市など浅間山麓地域と東京駅周辺地域のコラボレーションによるものが「浅間山麓元気アップ



プロジェクト」です。「東京・丸の内地球環境の森」の設営とふるさと納税制度を組み合わせた省CO₂対策、CATV網を活用した第二通信網構築やワンセグ放送事業を活用した相互防災応援などの**安心・安全対策**、環境貢献活動ツアーなどを通じた相互訪問促進などが進められています。小諸市の住民と大丸有エリアの就業者が顔を合わせて語るワークショップも開催されました。

三菱地所グループが核となり、山梨県北杜市を舞台に行われるものが「空と土プロジェクト」です。農山村部の現状や課題を知り、都市と農山村が互いを理解しながらともに元気に成長していく活動です。「NPO法人えがおつなげて」と協働して、開墾体験、間伐体験、親子自然体験ツアーなどが行われました。

みんなが安心・安全に過ごせる快適なまち

15 安全・安心まちづくり研究会・ 東京駅周辺防災隣組の活動

大丸有協議会では、安全・安心まちづくり研究会を設け定期開催しています。東京駅周辺防災隣組(地域協力会)の活動とコラボレートして、公民が連携して防災に関するさまざまな情報収集や調査研究に取り組み、まちにおける有事に備えた体制づくりをめざしています。2008年度は定期総会に際して講演会や参加型ワークショップ、シミュレーション訓練などを実施し、中央防災会議専門調査会の災害時帰宅シミュレーションなどの行政による対応や、災害時第二通信網の整備に向けた計画検討、新型インフルエンザ対策などのリスクマネジメントなどについて情報発信・普及啓発を図りました。また、洞爺湖サミット対策のテロ対応訓練やサミット会期中の地域安全パトロールを実施しました。

時代に応じて「自己進化」するまち

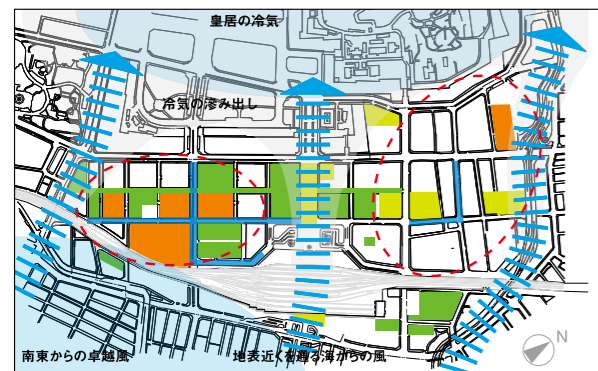
16 ヒートアイランド対策

大丸有協議会は、2007年度より環境省による「クー

ルシティ中枢街区パイロット事業」に参加しています。2年目となる2008年度は、新たに以下の6事業を行いました。

- 新東京ビル (屋上緑化)
- 新有楽町ビル (屋上緑化)
- 大手町地区第一次再開発 (屋上緑化・屋上農園部)
- 大手町地区第一次再開発 (太陽光高反射防水・日経棟)
- 丸の内パークビル (屋上緑化、保水性舗装、広場緑化、広場水景施設、高反射塗装)
- 東京国際フォーラム (窓ガラス遮蔽フィルム)

このうち新東京ビルと新有楽町ビルについては、2007年度に大丸有協議会とNPO屋上開発研究会の共同で実施した「屋上緑化アイデア提案競技」の最優秀賞を受賞した2作品が施工されました。



● 大手町・丸の内・有楽町におけるヒートアイランド対策

- 保水性舗装が実施されている道路
- 屋上・壁面緑化・街路樹が実施されている地区
- 2008年度クールシティ中枢街区パイロット事業実施地区
- 保水性舗装が予定されている道路
- 2009年度以降に事業が予定されている地区
- 将来的に事業が予想されるゾーン



● 屋上緑化コンペの大賞受賞作品が実際のビルに施工された。左・新有楽町ビル (緑化工事: 東邦レオ) / 右・新東京ビル (緑化工事: 田島緑化工事)

17 風の道

東京駅八重洲口側では、竣工したグラントウキョウ ノースタワーに大丸百貨店が移転し、旧ビルの解体工事が進んでいます。旧大丸百貨店のビルの解体により、海側から八重洲通りを抜けて行幸通りへ吹き込む**風の道**が確保され、**ヒートアイランド**現象を緩和する効果が期待されています。

18 エコモビリティ実験・グリーン物流実験 METROAD MARUNOUCHI

2009年2月9日から22日にかけて実施した「METROAD MARUNOUCHI」は、低炭素社会づくりおよび安全で魅力あるまちの実現をめざした社会実験です。大丸有地区「かしこい道路空間の活用」社会実験実行委員会が主催しました。

マルチポート型のレンタサイクルや、電気自動車(三菱自動車「i-MiEV」)のコミュニティタクシー・カーシェアリング、エリア内を循環する**丸の内シャトルバス**の発展的な活用、ペロタクシーを用いたエリア内**グリーン物流**「ペロジ」(ペロタクシー+ロジスティクス)など、エコモビリティが実験導入されました。



● 電気自動車が走り、レンタサイクルが行き交う光景は来街者からも注目を集めた

大丸有イベントカレンダー2008

大丸有エリアでは、四季を通じて、アート、環境、音楽、スポーツなど、バラエティに富んだ企画が行われていきます。就業者同士や、就業者と来街者など、ふだん接点

のない人々が交流する場や、まちの魅力再発見のきっかけにもなっています。

4月	● 丸の内アートウィークス2008 ● 常盤橋公園桜まつり ● 朝EXPO in Marunouchi spring ● 丸の内フラワーウィークス2008 ● 丸の内元気文化旬間
5月	● ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭2008 ● 丸の内シャトル、日比谷バス停新設 ● 世界フェアトレードデー2008 ● AERA創刊20周年記念写真展「坂田栄一郎 LOVE CALL—時代の肖像—」 ● 自転車スプリントGP「トリックスター」in 丸の内 ● 第15回ヘブンアーティスト
6月	● ブルーローバー・キャンペーン「父の日」スペシャルイベント ● 四国大夏祭り ● 第1回丸の内検定
7月	● 丸ビルで舞妓あそび。 ● ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル丸の内特別演奏会 ● 大丸有CSRレポート2008発行 ● 大丸有協議会20周年記念展示・シンポジウム ● SoulSwitch in MARUNOUCHI ● 大丸有インターンシップ2008
8月	● 打ち水プロジェクト2008 ● エコキッズ探検隊2008 ● 日本中国写真文化交流協会展「2008中国」 ● 丸の内軟式野球大会 ● 空と土プロジェクト 親子体験ツアー ● チャイニーズ・ドリーム in 丸の内 中国現代美術展 ● 丸の内キッズフェスタ2008 ● 東京JAZZ 2008
9月	● カウパレード東京丸の内2008 ● 日本橋川清掃 ● ふるさと回帰フェア2008 ● 朝EXPO in Marunouchi autumn
10月	● 丸の内地球環境倶楽部 キックオフシンポジウム ● 藝大アーツ イン 東京丸の内 ● 大丸有協議会、クールビズオブザイヤー「チームクールビズ」部門受賞 ● 東京丸の内ストリートスタジアム ● ピンクリボンフェスティバル2008 (スマイルウォーク&「Mayu-ココロの星」) 上映 ● ちよだ江戸祭2008 ● につぼん—大使たちの視線2008 ● 都市観光セミナー ● 浅間山麓元気アッププロジェクトワークショップ ● EAT JAPAN in Marunouchi ● 丸の内仲通りガーデニングショー2008 ● 第16回ヘブンアーティスト ● 空と土プロジェクト 森林体験ツアー
11月	● 日本橋川清掃 ● 空と土プロジェクト 開墾体験ツアー ● 明日の地球を考えよう〜丸の内です〜の気づき〜 ● 常盤橋公園球根植え付け ● 丸の内「イルミネーション2008」 ● 「HARMONIA '08-'09 TIF光と音のハーモニー」 ● 有楽町マルイ「クリスマス イルミネーション」 ● フェリシモクリスマスアーカイブスミュージアムコレクション展
12月	● Sparkling★Christmas ● 隣人祭り ● 光都東京・LIGHTOPIA2008 ● 東京丸の内ガラ・コンサート2008 ● 常盤橋竹灯籠
1月	● Marunouchi house Meets Mie ● 「東京・丸の内環境の森」林業体験ツアー
2月	● 東京丸シェフ マルシェ ● METROAD MARUNOUCHI ● 大恐竜展in Tokyo Marunouchi
3月	● 丸の内文化祭2009 ● 三菱地所&Suono Dolce with Yuming in Marunouchi ● Tokyo Marunouchi Tulip Fair
通年企画	● 大江戸骨董市 ● リガーレセミナー ● ママカフェ ● 地球大学 アドバンス・地球大学クリエイティブ ● 東大リレーセミナー ● ベストフリーマーケットin東京国際フォーラム ● 丸の内ウォークガイド ● 丸の内カフェセミナー ● 丸の内さえずり館ネイチャーセミナー など多数

大丸有に関わる方々

大丸有コミュニティに関わる方々についてご紹介します。

大丸有コミュニティのステークホルダー

大丸有コミュニティでは、さまざまな利害関係者（**ステークホルダー**）がまちづくりに関わっています。地権者・ビルオーナー、行政、インフラ事業者、テナントといった大丸有エリア内のステークホルダーのほか、就業者、来街者、市民社会、金融機関、サプライヤー（供給業者）といった、大丸有エリアの枠にとどまらないステークホルダーもいます。

大丸有コミュニティはこれらのステークホルダーが有機的に連携して形づくられており、それぞれの立場から大丸有コミュニティの意思決定に関わっています。

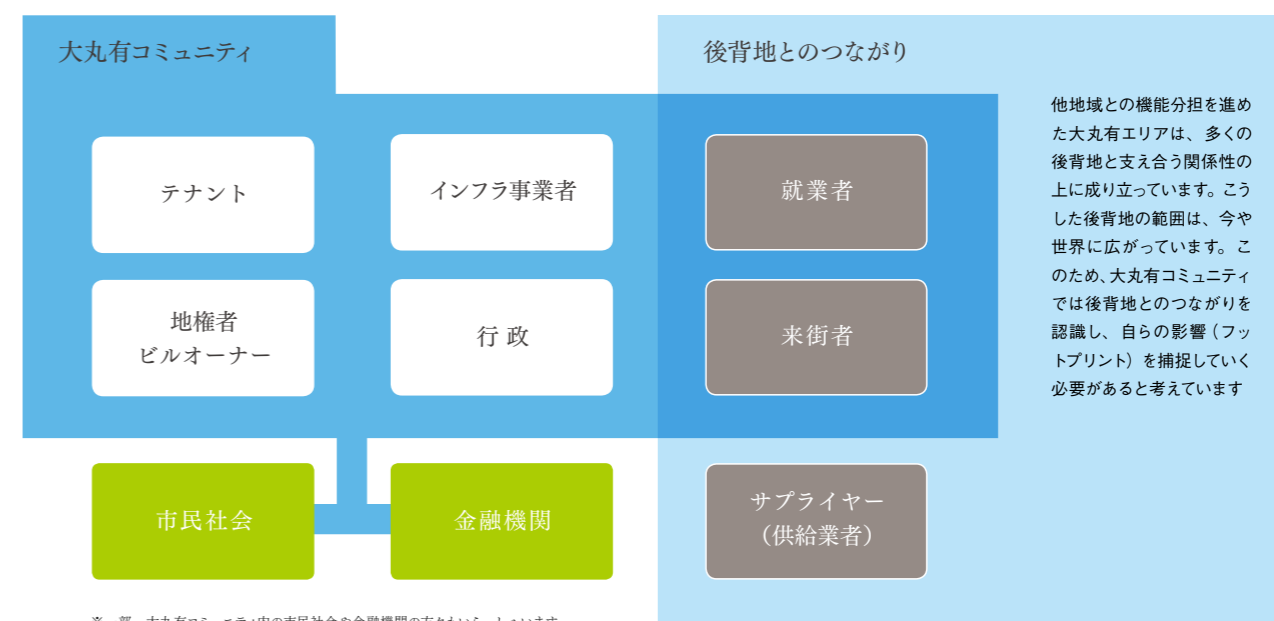
ステークホルダーとの対話についての考え方

大丸有コミュニティでは、自らの未来像と役割を探るため、多くの有識者やステークホルダーから定期的にご意見をうかがう取り組みを2007年よりはじめました。

まず、広く社会と都市の未来像について、さまざまな分野の第一線で活躍する方々から、できるだけ制限のない幅広い視座でご意見をいただく場を設けています。これまでに7名の方からご意見をいただきました。また、大丸有コミュニティに絞って、まちの**持続可能性**に向けた課題や役割をおうかがいするために、複数のステークホルダーが集まった「ステークホルダーズ・ミーティング」を実施しています。

これら有識者やステークホルダーの声については、大丸有コミュニティの方々と共有するためにCSRレポート（ウェブサイトおよび冊子）で内容を紹介しています。

大丸有のステークホルダー



ステークホルダーとの対話

ステークホルダーとの対話を通して、大丸有のありかたを見直しています。

働く女性たちの「大丸有への目安箱」

大丸有には、そこで働く人、遊びに来る人、移動の途中で立ち寄る人など、さまざまな人が行き来します。まちに関わるすべての人にとって快適な場所であるために必要なものはなにか。4名の働く女性にお集まりいただき、女性ならではの視点で大丸有への率直なご意見をうかがいました。

(開催日：2009年4月3日、開催場所：丸の内「エコツェリア」)



いただいた主なご意見



河口 真理子

(株)大和総研
経営戦略研究所 経営戦略研究部長 主任研究員

「大丸有は便利で道も整備されていて気持ちがいい反面、非常に人工的で

取り付くしませんが印象もあります」

「おしめ替えの場所は男女両方のトイレに設置されているのか、などということを見ると、大丸有は子どもを連れてくる場所というより、大人の空間であるように思います」



東福寺 なおみ

日本パシフィックセンチュリーグループ
執行役員 COO、NPO法人大丸有エアーマネジメント協会 理事

「この地区は、この10年でとても変わったな、と思うんですよ。街がきれいになりましたし、昼間と夜、平日と週末の人口のバランスがとれるようになりました。本当に努力の賜物だと思います」

「自転車置き場が限られているので、自転車シェアリングなどの仕組みができればいいと思います」



村山 祥子

(株)日本経済新聞社 文化事業部

「大丸有にはエスカレーターとエレベーターが少ないですね。東京駅が近く、出張の方など大きい荷物を持った方も多くいらっしゃるの、そういう方への配慮があるとより便利だと思います」

「お母さんたちからは、ベビーカーの車輪がひっかかりやすいという声や、エレベーターの台数が少ないのでベビーカーで乗り入れるのが心苦しいという声を耳にしますね」



山下 朋恵

(株)ティップネス 丸の内支店 支配人

「大丸有は、地下道が非常に発達しているので、迷ってしまいます。地上に出ると皇居やターミナルから方向がわかるのですが、地下は迷路のようなので目的地への距離も心理的に遠く感じてしまいます」

「このエリアの中で、ビジネスマンも観光客も子ども連れのお母さんも、さまざまな立場の方々がそれぞれ居心地よく過ごせる場所を構築できるといいと思います」

未来のエネルギーとモビリティ

1000年続く持続可能なまちづくりには、今後どのような技術を適用すればいいのか。特にエネルギーとモビリティについて、歴史を振り返りながら、未来のテクノロジーを見つめながら、どんな技術をどう利用すべきか。5名のさまざまな分野の専門家の方々に、膝を詰めてご議論いただきました。

(開催日：2009年3月23日、開催場所：丸の内「エコツェリア」)



いただいた主なご意見



青山 俊介

(株)環境構想研究所 代表

「これからは、電気自動車やハイブリッドカーなどでエネルギーを減らすのか、人が歩くことなどの行動からエネルギー消費を変えるのか、どちらの選択肢もあると思います。それをまちづくりでどう実現していくのが、テクノロジーの腕の見せ所です」



飯田 哲也

NPO法人環境エネルギー政策研究所 所長

「電気による機械化を極端に進めてしまった日本人が適度に自然と共存する『ほどほど感』と人間の目線を取り戻すことが重要だと思います」



石川 英輔

作家、江戸文化研究者

「世の中には人間にとって『悪いエネルギー』と『無害なエネルギー』の2つに分かれると私は考えています。人間にとって過剰で私たちの体を悪くする『悪いエネルギー』はできるだけ減らすべきです」



岸村 俊二

(株)キシムラインダストリー 代表取締役

「太陽エネルギーで常に充電を満タンにしておいて、電力の基本料金を上げずに充電できる電気自動車システムをつくりたいと思っているんです」



小林 重敬

東京都市大学 教授、NPO法人大丸有エアーマネジメント協会 理事長

「地区全体の環境と街区単位の環境の両方を、ひとつのまとまりをもってマネジメントする必要性を、私たちは江戸時代の家守(やもり)という役割から学んでいます」

江戸時代の家守(やもり)という役割から学んでいます」

今回および過去に行われたステークホルダーズ・ミーティングの全文は下記URLにて読むことができます。
<http://ecozzeria.jp/csr2009/dialogue>

大丸有の健康診断

大丸有の現在の状態を表すモノサシを例示します。

大丸有というまちの現在の状態を表すために、いくつかの指標を例示してみました。これらの指標を取り上げるにあたっては、GRIガイドライン第三版や**ステークホルダー**の方々からいただいたご意見を参考にしました。

なお、これらの指標は、必ずしも「数字が増えたからいい、減ったからいい」というものではありません。個々の指標を一面的に評価するものではなく、総合的に評価するための判断材料として試行的に提供しています。

大丸有に本社を置く企業のうち、
3つの代表的SRI indexへの組入銘柄のべ数

33社

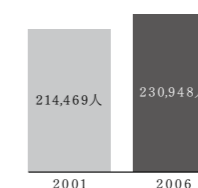
index名	組入銘柄数	
	大丸有	日本全体
DJSI	6社	36社
FTSE4Good	23社	189社
Ethibel	4社	22社
計	のべ33社*	のべ246社

*重複を除くと大丸有に26社

SRI^{★1}の観点で選んだ企業のみで構成する株価指数がSRI indexです。いわば「CSR優良企業」ばかりを集めた、株価の値動きを示すモノサシです。代表的な3つのSRI indexには、大丸有に本社を置く企業が数多く組み入れられています。

大丸有が生み出している雇用（就業者数）

230,948人



*就業者数は「平成18年事業所・企業統計調査報告町丁目編」による2006年の従業員数。住民数は「住民基本台帳」による2009年の住民登録数

大丸有には230,948人^{*}が働いています。一方、大丸有に住んでいる人は31人^{*}だけです。大丸有は、多くの働き手を引き付けており、昼夜間人口の差が非常に大きい地域となっています。

一般受け入れをしている託児・保育施設の数

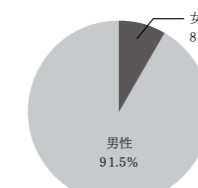
1施設

*2005年11月開設の、キッズスクウェア 丸の内東京ビル

大丸有エリアには、企業が自社の社員向けに開設している託児・保育施設はいくつかありますが、一般の方を受け入れているのは1施設^{*}のみです。働いている場所の近くに子どもを預けたいというニーズは高く、この施設の月極め保育には定員数の何倍もの入所申込があります。需要に対し、まだ十分な施設が整備されていないのが現状です。

役員に占める女性の割合（有給役員のみ）

8.5%



*2006年、平成18年事業所・企業統計調査報告町丁目編

大丸有に事業所を置く会社の有給役員4,919人のうち、女性は418人^{*}。その割合は8.5%に過ぎません。一方、東京都全体では、有給役員624,357人中、女性は154,372人となり24.7%を占めます。残念ながら、大丸有は他地域と比べても男女の雇用・登用の機会が均等ではないようです。

大丸有によるCO₂排出量

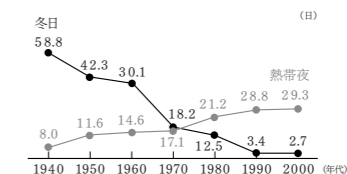
80万t-CO₂程度

*東京都が地球温暖化対策計画書制度に基づき温室効果ガス(GHG)排出量を公表する対象事業所のうち、大丸有エリアにある63棟の2007年度実績値から導いた単位面積あたりGHG排出量125.5kg-CO₂/㎡年に、大丸有エリアの2007年度延床面積637haを乗じて推計。CSRレポート2008でも、別な方法で推計した2007年度のGHG排出量を報告したが、より妥当性の高い実績を再報告した。一般家庭のCO₂排出量(約5,350kg)は、全国地球温暖化防止活動推進センターの試算による2007年度の実績

大丸有による電気の使用や都市ガスの燃焼などで直接・間接に排出したCO₂は、80万t-CO₂程度となります。これは、一般家庭に換算すると約15万軒分となります。大丸有エリアにさまざまな機能が集約されていることを示していますが、今後は経済活動と環境負荷のデカップリング(切り離し)が必要です。

大手町の熱帯夜の年間平均日数

29.3日



*2000年代のみ2000年～2008年の9年間の平均

大手町にある気象庁の観測地点における、2000年代^{*}の熱帯夜^{★2}の年間平均日数は29.3日。10年ごとの平均日数を経年比較すると増加傾向となっており、一方で、冬日^{★3}は減少傾向にあります。これらは主に**ヒートアイランド**現象の影響によるものと考えられます。

★1 SRI: Socially Responsible Investment (社会的責任投資)の略。社会や環境に配慮していると思われる企業を選んで投資したり、配慮していないと思われる企業を投資対象から外したりする投資の手法

★2 熱帯夜: 夕方から翌日の朝までの最低気温が摂氏25℃以上になる夜

★3 冬日: 一日の最低気温が摂氏0℃未満になる日

編集方針

CSRレポートとしての本冊子の特徴や編集方針をお伝えします。

指標の一覧

基礎指標	実績	備考
就業者数	230,948人	2006年。東京都「平成18年事業所・企業統計調査報告 町丁目編」
事業所数	4,064事業所	
住民数	31人	2009年。東京都「住民基本台帳による世帯と人口」平成21年1月
総延床面積	約637ha	2008年3月時点。建設中約64haを除く
建築物数	104棟	2008年3月時点。建設中を除く
緑被率（水面を除く）	6.7%	2003年。大手町と丸の内のみ。千代田区による調査
駐車場数	約13,000台	2009年3月時点
鉄道網	5駅20路線	5駅は大手町、東京、二重橋前、日比谷、有楽町。20路線はJR13路線、地下鉄1路線、東京メトロ6路線
駅の乗降客数合計	1,774,742人	新幹線を除く。オリコム交通媒体局「Circulation transit / outdoor ads サーキュレーション資料 2008年版」
大丸有に本社を置く企業のうち、3つの代表的SRI indexへの組入銘柄数	のべ33社 (重複を除くと26社)	DJSI (2009年2月28日時点) 6社、FTSE4Good (2009年5月1日時点) 23社、Ethibel (2009年3月20日時点) 4社
経済指標	実績	備考
大丸有地区に本社を置く上場企業の売上高合計と、日本のGDPに占める割合	132兆2114億円 (25.6%)	売上高合計は東洋経済「会社四季報」2008年秋版(2007年度実績)。日本のGDP(515兆9772億円)は内閣府による2007年の数値
社会指標	実績	備考
最低賃金額	766円	2009年4月時点。大丸有が含まれる東京都の最低賃金
就業者数の男女比	男：女=61：39	
正社員・正職員の男女比	男：女=73：27	2006年。東京都「平成18年事業所・企業統計調査報告 町丁目編」より算出
有給役員の男女比	男：女=92：8	
一般受け入れをしている託児・保育施設の数	1施設	2009年4月時点。キッズスクウェア 丸の内東京ビル
バリアフリー法の認定を受けた建物の延床面積と全体に占める割合	431.1ha (68%)	2007年3月時点
環境指標	実績	備考
熱帯夜の年間平均日数	29.3日	2000年代(2000年～2008年)の平均(1940年代は平均8.0日)
冬日の年間平均日数	2.7日	2000年代(2000年～2008年)の平均(1940年代は平均58.8日)
エネルギー使用量(建物など)	18,106TJ程度	大丸有エリアの三菱地所所有のISO14001取得ビル19棟実績(2008年度)より推計(参考値)
CO ₂ 排出量(建物など)	80万t-CO ₂ 程度	2007年度の推計値。詳細はP.29を参照
CO ₂ 排出量(通勤)	48,244t-CO ₂	2006年度の推計値(CSRレポート2008を参照)
保水性舗装が施された道路の面積	約33,600m ²	2009年3月時点。三菱地所株式会社都市計画事業室調べ
屋上・壁面緑化の面積	約12,000m ²	2009年3月時点。三菱地所株式会社都市計画事業室調べ
上水使用量	730万m ³	大丸有エリアの三菱地所所有のISO14001取得ビル19棟実績(2008年度)より推計(参考値)
事業系一般廃棄物排出量	53,207t程度	2006年度の推計値(CSRレポート2008を参照)
皇居で観察された動物種数	3,638種	1996～2000年度。独立行政法人国立科学博物館「皇居の生物相調査(第一期)」
皇居で観察された植物種数	1,366種	
自然観察会への参加人数	約470名	さえざり館が2008年度に9回開催した「皇居東御苑の自然観察」へ参加したのべ人数

※出典のないものは、大手町・丸の内・有楽町地区再開発推進協議会調べ

制作にあたっての考え方

親しみやすく、わかりやすいこと

一般企業などのような組織ではないため、大丸有コミュニティがCSRの取り組みを進めるには、地権者・ビルオーナー、テナント、就業者、行政、インフラ事業者、来街者など、多様な関係者(ステークホルダー)を巻き込むことが一層重要です。そのため、広く一般の方に配布することを念頭に置いて、私たちのめざすビジョンや取り組みをできるだけ親しみやすく、わかりやすい形で伝える編集としました。

大丸有コミュニティの未来像と役割を探ること

大丸有コミュニティの未来像と役割を探るため、多くの有識者やステークホルダーにご意見をいただきました。広く社会と都市の未来像については、昨年に引き続き有識者からできるだけ制限のない幅広い視座でご意見をいただきました。(P.4～11「2050年へのまなざし」)大丸有コミュニティが**持続可能性**のために取り組むべき行動については、今回、2つのテーマに絞り、ご意見をいただきました。(P.26～27「ステークホルダーとの対話」)

GRIガイドラインと環境報告ガイドラインを参照

GRIガイドラインは、あらゆる組織を対象としたガイドラインであり、持続可能性報告の事実上の標準となりつつあります。そこで、可能な限りGRI「サステナビリティ・リポーティング・ガイドライン第三版」に沿った形の報告を心掛けました。また、環境省の「環境報告ガイドライン 2007年度版」も参照しました。

報告分野

経済・社会・環境のトリプルボトムラインおよびガバナンス(まちづくりの運営の仕組み)について報告しています。

報告範囲

東京都千代田区の手町、丸の内および有楽町の地域を報告範囲としています(うち、**大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会**が定めるもので、一部の地区を除く)。

報告期間

基本的に2008年4月1日～2009年3月31日の取り組みについて報告していますが、一部、それ以降の活動予定や計画についても記載しています。

発行日

2009年6月(次回発行予定2010年6月)

お問い合わせ

大丸有コミュニティSR推進委員会事務局

(エコツツェリア協会内)

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-5-1 新丸ビル10階

TEL:03-6266-9400 FAX:03-6266-9401

発行主体

大丸有コミュニティSR推進委員会

大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会

〒100-8133 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル6階

http://www.lares.dti.ne.jp/~tcc

特定非営利活動法人 大丸有エアリアマネジメント協会

(リガーレ)

〒100-8133 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル

635区 http://www.ligare.jp

エコツツェリア協会

(一般社団法人 大丸有環境共生型まちづくり推進協会)

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-5-1 新丸ビル10階

http://ecozeria.jp

三菱地所株式会社

〒100-8133 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル

http://www.mec.co.jp



大丸有コミュニティSR推進委員会

大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会
特定非営利活動法人 大丸有エリアマネジメント協会（リガール）
エコツェリア協会（一般社団法人 大丸有環境共生型まちづくり推進協会）
三菱地所株式会社

<http://ecozeria.jp/csr2009>

